
俺は僕で僕は

勦b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は僕で僕は

【Nコード】

N1475BA

【作者名】

勲b

【あらすじ】

『ナイトオブトゥエルブ』の地位につく彼女、モニカ・クルシェフスキーには弟がいた。

だが、その弟は偽りで

弟には秘密がある。

それは自身ですら知らない秘密

偽りに塗りつぶされた秘密

プロローグ（前書き）

タイトルは何時か変える予定です

途中から視点が三人称になっています

ブローグ

「構えろ」

僕がそう言つと周りにいる人全員が目の前にいる彼女に銃口を向ける。

「おいおい、私はそんなものでは死なんぞ」

「撃て」

僕が引き金を引くと同時に周りにいた人皆が彼女を撃ち抜いた。

「……止める」

そう言つと周りの人は撃つのを止める。

「まだ協力者がいるはずだ、探しだせ」

『わかりました、C・C様!!』

息を合わせて応えると全員が散らばっていった。

「くっ……」

僕は目の前で血塗れになり倒れている彼女
C・Cさん
を見下す。

「流石の貴方でもマヒ弾は堪えるようですね」

「くっ……止める」

僕はC・C・さんを見無視して歩きだす。

「今のお前じゃ……あいつは殺せないぞ」

「そんなこと無いですよ」

僕は振り向いて彼女に自身の瞳を見せ付ける。

「僕のギアスは最強だ」

それは今実証されたんだ。

ギアスが効かないC・C・さんを倒せた。

やっぱり、僕のギアスは

ゆっくりと歩きながら、施設から出る。

「後悔……するぞ」

C・C・さんの言葉に振り向くことなく歩く。

「構いませんよ」

振り向かずに応える。

「ルルーシュ様とナナリー様の敵が取れるんだったら」

自身の決意を再確認するように

「何だってするし、後悔なんてしない」

力強く言った

「して、ビスマルクよ我に用とはなんだ」

「陛下、人払いのほうは」

「お主の言う通りにしてやったわ」

ちよろいな。

僕は前を見る。

目の前には、あの男

ルルーシュ様とナナリー様を殺した男

神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニア
が背を向けて立っている。

僕は隠すように後ろ手で持っている片手銃を強く握る。

「では、陛下に1つ言っておきたいことが」

銃口をシャルルに向ける。

殺せる。

これで、この男を

殺せる!!

「死んでください」

ゆっくりと僕は引き金を引く

が

「やらせぬ!!」

「なっ!!?」

急に現れた男 ビスマルクは俺から銃を奪うと床に叩きつけられた。

「して、ビスマルクよ、この曲者が?」

「はっ! 私のギアス嚮団から逃げ出した者かと」

ッ!?

こいつら、口振りからしてギアスを知ってる！？

「ギア
」

「させぬ！」

ビスマルクは僕の背中を殴る。

「がつ
」

意識が一瞬遠退く。

「ルルーシュ……様……ナ……ナリー様」

敵を……僕……が

少年の意識が遠退くと、彼のギアスが解けた。

「なっ！ 子供だと！？」

先ほど迄ビスマルクと瓜二つだった容姿はみるみる子供に変わっていた。

「……ルルーシュ殿下よりも年下、もしくは同年代でしょうか」

ビスマルクは少年が口にしたルルーシュと比べるが、シャルルはどうでもよさそうに言う。

「ビスマルクよ、その者の顔を見せろ」

ビスマルクはシャルルの言う通りにする。

「……この者は使えそうだな」

「な……を」

興味深そうに言うシャルルに少年は力なく応える。

「シャルル・ジ・ブリタニアが刻む」

「ギ……アス……！？」

「新たなる偽りの記憶を！！」

シャルルのその言葉を最後に少年は完全に意識を手放した。

それから数年後

少年の物語は新たなる始まりを迎える

ブログ（後書き）

こんにちはー ぶーす

ギアス連載書きたかったんですよ

ヤンデレにするかどうかは不明です。

ただ、モニカ好きの作者が頑張るだけの連載になりますが、応援してくれたら嬉しいです！！

PS 連載削除ゲームを開催準備中です

詳しいことは私の活動報告を見てください

偽りの弟編 1 (前書き)

はじめの会話は何となく書きたかったただけです

偽りの弟編 1

「もうすぐ日本とブリタニアが戦争を始めるらしいわ」

「へー」

「もう、騎士になろうと志す者が自国の戦争に興味を無くしてたらダメでしょ」

「“俺”は姉さんを守る騎士になりたいんだ、ブリタニアには興味は無い」

「……もう、調子いいこと言って」

「……日本」

「日本がどうかしたの？」

「……何か、複雑な気持ちなんだ。よくわからないけど」

「

目の前にいるサザーランドがランスを構える。

俺が乗っているKMFもサザーランドだ。

違うのは構える武器がないことだ。

「どうやら、銃弾が底を尽きたようだな」

相手は勝ちを確信したのか、どこか余裕を感じる口振りだ。

「悪いな、今回は俺の勝ちだ

」

そう言っで一気に距離を詰めると相手はランスでコクピット目がけて思いっきり突いてくる。

俺はその突きをしゃがんで躲すとスタントンファアで足を殴る。

「勝利を確信するのは

」

そのままの勢いでバランスを崩した相手のコクピットをスタントンファアで思いっきり殴った。

「まだ速いと思いますよ」

いい終わると同時に相手の撃破判定が出た。

「勝者、ダーナ・クルシェフスキー！！」

俺がシミュレーターから出ると教官がそう言って近づいてきた。

「流石はダーナ、いい試合だった」

「ありがとうございます」

いい試合？

あんな詰まらない相手との何処がいい試合だったんだ。

「くっそっ！ 今度こそダーナに勝てると思ってたのに！！」

「残念でしたね」

教官は向かいにあるシミュレーターから出てきた相手にも同様のセリフを吐いた。

はあ、早く姉さんの傍にいきたい。

ゆっくりと歩きだしながら、たった一人の家族であり、たった一人の姉のことを考える。

……モニカ姉さん

「ダーナ、お前にお客さんだぞ」

部屋を出ようとした俺を先ほどとは違う教官が呼び止めた。

お客さん……もしかして！？

「応接間で待たせてるから……」

「ありがとうございます！！」

俺は頭を下げて急いで応接間に向かった。

「ダーナ」

「モニカ姉さん！」

応接間に入ると真っ先に入ったのは俺の最愛の姉だった。

「こんな時間にどうかしたの……いや、それよりも言いたいことがあるんだった」

モニカ姉さんは首を傾げる。

「ラウンズ就任おめでとう」

ナイトオブラウンズ

姉さんはこの間、ナイトオブラウンズの1人、ナイトオブトゥエルブに就任したのだ。

自慢の姉だ。

「もう、この間も聞きましたよ」

「2人っきりの時に言いたかったんだよ」

ラウンズの就任の時にちょっとしたパーティーがあり、弟である俺ももちろんパーティーに参加した。

その時にも祝ったが、俺としては2人っきりで祝いたい。

「ありがとう、ダーナ」

優しく俺の頭を撫でながら言うモニカ姉さん。

「でもこれで、姉さんを守る騎士になるには難しくなったよ」

姉さんの親衛隊になるか、それとも

「私がダーナ守るから、ダーナは私を守らなくてもいいですからね。」

私はダーナのお姉ちゃんだから当然です。

ですから、ダーナは何かあったら私に頼るんですよ」

……嫌だね

俺は姉さんを守るぐらい強くなる。

たった一人の家族を守りたい

姉弟で話していると扉がノックされる。

それを聞き、モニカ姉さんは慌てて俺の頭を撫でるのを止める。

……もつと撫でてほしかったかな

「失礼します」

そう言って入ってきたのは、ここブリタニア士官学校の理事長だ。
こんな間近で初めて見たな。

「理事長……？ 姉弟水入らずの時に何か用ですか」

詰まらない用なら……

「そう睨むな、ダーナ・クルシェフスキー。これはお前からしても、とても興味深い話のはずだ」

興味深い話？

興味深いなー。

「ダーナ、お前は我らがブリタニア士官学校は何年かに一度、本国各地にある三ヶ所の士官学校から、各一人ずつ学校から有望な人材を推薦するのを知ってるか？」

「知りません」

そんな話は今初めて知った。

つか、それを今、俺に言っつてことは

「そうか、この学校はダーナ、お前を推薦しようかと思っている」

「ありがとうございます」

流石は実力主義ブリタニア、強ければ強いほどトントン拍子に話が進む。

「よかったですね、ダーナ！」

姉さんも嬉しそうに笑みを浮かべながら俺を褒める。

でも

理事長は違う

理事長は重苦しい顔をして言った

「ダーナ・クルシェフスキー、君はEU攻略に参加してもらう」

えっ？

EU……攻略？

訓練じゃなくて……いきなり、実戦……？

実力主義ブリタニア

俺はこの国を少し舐めていたのかもしれない。

この国は強い者ならば即実戦に使う。

恐ろしい国らしい

ダーナ・クルシェフスキー

まだ子供でありながら、ブリタニア士官学校に入り、度重なる飛び級を経て最小年卒業かと思われていた少年。

幸か不幸か

いや、不幸なのだろう

今年は、そんなダーナが卒業する年であり、数年に一度ある実戦投入の年だ

この実戦投入は事実上、作戦が上手くいくための捨て駒

今までも生きて帰ってきたのはごく数名

だが、この実戦投入から帰ってきた逸材は、即評価される

そう

ブリタニア皇帝直属の騎士であり帝国最強の12騎士

ナイトオブブラウンスになるには、最も険しく、最も最短な道だ

偽りの弟編 1（後書き）

次回は皆大好きあの人登場！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475ba/>

俺は僕で僕は

2012年1月5日23時49分発行